

社会学徒半世紀の軌跡と展望 その1

——九州大学文学部社会学研究室での学び——

三浦典子

1 はじめに

これまで筆者は、『内藤莞爾の社会学——九州大学文学部社会学研究室の窓から——』（学文社、2021 年）および『鈴木広の社会学——九州大学文学部社会学研究室の窓から——』（学文社、2026 年）を刊行してきた。九州大学文学部社会学研究室に教授、助教授という立場で所属されていた先生方の社会学的研究を、可能な限り原典にあたって丁寧に読み返し、それぞれの先生の研究の蓄積を明示することに努めてきた。

それぞれの著書のもととなった初出論文は、山口大学社会学研究室を拠点に、辻正二、横田尚俊、高橋征仁、および筆者が、2002 年 10 月 27 日に設立した「山口地域社会学会」の機関紙『やまぐち地域社会研究』に、長年にわたって発表してきた論文である。

内藤莞爾に関しては、

三浦典子、2018「内藤莞爾の社会学 その1——社会調査への誘い——」『やまぐち地域社会研究』（山口地域社会学会）15 号、1-16 頁。

三浦典子、2019「内藤莞爾の社会学 その2——村落調査から末子相続調査へ——」『やまぐち地域社会研究』（山口地域社会学会）16 号、1-12 頁。

三浦典子、2020「内藤莞爾の社会学 その3——社会学的末子相続の研究——」『やまぐち地域社会研究』（山口地域社会学会）17 号、1-14 頁。

三浦典子、2021「内藤莞爾の社会学 その4——総括：内藤社会学に通底する比較宗教社会論——」『やまぐち地域社会研究』（山口地域社会学会）18 号、1-16 頁。

鈴木広に関しては、

三浦典子、2022「鈴木広の社会学 その1——鈴木社会学の概要——九州大学文学部社会学研究室の窓から Part2——」『やまぐち地域社会研究』（山口地域社会学会）19 号、69-84 頁。

三浦典子、2023「鈴木広の社会学 その2——東北大学文学部社会学研究室での学び——」『やまぐち地域社会研究』（山口地域社会学会）20 号、45-64 頁。

三浦典子、2024「鈴木広の社会学 その3——九州大学で萌芽した『社会移動の研究』——」『やまぐち地域社会研究』（山口地域社会学会）21 号、53-76 頁。

三浦典子、2025「鈴木広の社会学 その4——社会移動とコミュニティの実証的研究——」『やまぐち地域社会研究』（山口地域社会学会）22 号、23-44 頁、である。

これらの論文の直接的な目的は、筆者が、学生、大学院生、助手として長年所属してきた九州大学文学部社会学研究室において、指導を受けた 2 人の先生の社会学的研究をまとめていくことであつたが、最終的には、その背後にある大学研究室という対面的な学びの場の

もつ存在意義を示したいという大きな目論見があった。すなわち、『内藤莞爾の社会学——九州大学文学部社会学研究室の窓から——』の冒頭のプロローグにも示したように、「社会学の社会学」という問題関心である¹⁾。

「社会学の社会学」は科学社会学に位置づけられ、その視座は、筆者が学部学生時代に読んだ、R. K. マートンの『社会理論と社会構造』日本語訳の第4部「科学の社会学」に所収された論文や、1973年に出版された、R. K. Merton, *The Sociology of Science* (The University of Chicago Press)から学んだものである。

そして本論「社会学徒半世紀の軌跡と展望」は、直接的には筆者の半世紀以上にわたる研究活動を総括することを目的としているが、その背後には同じような「社会学の社会学」という目論見があることを最初に述べておきたい。

まず、その1では、社会学的研究の出発点となる「九州大学文学部社会学研究室での学び」について述べていきたい。

2 社会学との出会いと研究者としての手ほどき

筆者が九州大学に入学することを決めたいきさつや、いかにして文学部にある研究分野のうち社会学研究室に所属するようになったかについては、『鈴木広の社会学』（学文社、2026年）や、「流動型社会の功罪」ですでに詳しく述べたとおりである²⁾。

そのうち「流動型社会の功罪」は、鈴木広先生に社会学の教えを受けたものが、どのように鈴木社会学を継承し発展させてきているかを確認するために、日本社会分析学会が第124回研究例会（2012年12月）において、特別企画「鈴木広の社会学の継承と発展」部会を企画し、その部会での筆者の報告に基づいて執筆したものである。

ここでは簡単に、社会学との出会いについて概略を述べておきたい。1965年、筆者が九州大学に入学した当時、入学後1年半は、福岡市六本松の「教養部」で学び、その後、箱崎にあった文学部に進学することになっていた。どの専攻分野に所属するかは、学生自身が選択・希望し、教養部での成績によって決定された。

文学部では心理学にするか社会学にするか、専攻分野の選択に迷っていた時期に、先輩の「社会学研究室には、鈴木広という面白い先生がおられるよ」、「社会学では、やりたいことが何でもできるよ」という助言で、社会学を専攻することを決定した。

この先輩との出会いは、入学直後のクラス単位のオリエンテーションであり、その後、彼女に誘われて、教養部の先生方の仕事を手伝うようになった。教養部には、社会学を含む社会科学系の先生方が利用されている社会科学研究事務室があり、その事務室に出入りすることが多くなった。そこには大西さんという女性事務職員がおられ、ガリ版刷りや資料整理などの雑事の手伝いをしながら、彼女から手際よい資料整理の仕方を学んだ。

また、論文を書かれた先生の校正刷りが回ってきた時には、その先生から、まず校正記号や校正の仕方を教えてもらい、校正の手伝いをしたこともある。社会学の先生からは、「文学部の学生なのに、なぜ社会学の手伝いをしないか」など嫌味を言われたりもしたが、社会

科学研究事務室では、いわゆる研究者として必要な初歩的な技法を身につけることができたように思う。

これは後で知ったことではあるが、社会科学研究室に所属しておられた先生方の多くは、九州大学経済学部におられたマルクス主義経済学者の向坂逸郎に直接的・間接的に学んでおられ、向坂を旗頭とする社会主義協会に関与しておられた。その関係で、三井三池闘争を闘ってきた労働組合の記録を残す仕事や、向坂が翻訳して岩波書店から発行されていた、K. マルクスの『資本論』12冊の文庫本を、資本論刊行100周年記念として、3巻4分冊にして出版する際の、索引づくりなどの仕事をしておられた³⁾

資本論の索引は、『100周年記念 資本論』（岩波書店、1967年）では、4分冊の最終巻（3巻第2部）の13-166頁を占めており、膨大なものであった。索引の移行作業は、具体的には、文庫本の索引にある人名や事項の頁が、冊子体の校正刷りの何巻の何頁になるのかを確認する大変な作業であった。その作業には向坂の多くの弟子たちがかかわっていたが、その一部の手伝いをしたことになる。文学部に進学する直前の夏休み以降、かなりの時間を費やしたと記憶している。資本論のあちこちを何度も読み返すことになる作業ではあったが、意図せず、資本論を通じてマルクス主義的経済学の視点を垣間見て、経済と社会とのかかわりについて興味をもつことができた。

完成した『100周年記念 資本論』は、アルバイト料の一部としていただいた。卒業論文を提出し、卒業するまでの4年生の最後の余裕のできた時間を、毎日、九州大学図書館に1冊ずつ持参して、最初からすべて読み通した。

向坂逸郎の講義を直接受けたことはないが、のちに福岡県知事となられる奥田八二先生の社会思想史の講義では、向坂逸郎『マルクス伝』（新潮社、8刷、1966年）がテキストとして用いられた。福岡市で向坂の講演会が開催されたことがあり、その講演会の受付の手伝いをしたことがある。たまたま『マルクス伝』を持参していたのでサインをお願いしたところ、「怠惰な勉強は怠惰を学ぶことに近い 三浦典子様」と書いていただいた。そのサインを見て、怠惰に学んではいけないと思いながらも、いっそう励まなければならないと肝に銘じた。

蛇足ではあるが、教養部経済学の川口武彦先生は、向坂の第1の後継者であったが、社会主義運動の開拓者といわれる福岡県出身の堺利彦全集の新たな出版に携わられた。『堺利彦全集』は、昭和8年に中央公論社から出版された全6巻があったが、「堺利彦誕生100周年記念・法律文化社創業25周年記念」として、『堺利彦全集』全6巻の出版が計画された。新しい全集は、旧全集をもとに、論稿を多少入れ替えて編集されたが、原則として、当用漢字、現代かなづかいに改めて出版することにされた。その書き替えのために、筆者をはじめ九州大学の学生が協力した。学部に進学して以降であったが、学生たちの取りまとめ役を筆者が担った。『堺利彦全集』（法律文化社、1970年）全6巻も、刊行後、アルバイト代の一部としていただいた。

以上みてきたように、教養部において、社会科学研究室の先生方から、研究者としての初

歩的な手ほどきや、研究者は教育研究以外にも多様な役割を担っていることを学んだ。

そして文学部に進学して、希望していた社会学研究室に所属することができ、内藤莞爾教授と鈴木広助教授から本格的に社会学を学ぶことになった。

3 三浦典子の社会学の全体概要

3. 1 研究経歴と学会活動

まず最初に、筆者の社会学の全体像を示すために、九州大学文学部社会学研究室を卒業して以降の、研究経歴と学会所属とを、表1に簡単に示しておきたい。

表1 研究経歴と学会活動

年次	研 究 経 歴	学 会 活 動
1969	九州大学文学部社会学専攻卒業	日本社会学会会員（1969年～
	九州大学文学部助手（～1972）	西日本社会学会会員（1969年～
1972	九州大学大学院文学研究科修士課程入学	九州大学社会学会会員（1969～80年）
1974	九州大学大学院文学研究科博士課程（～1978年）	社会分析学会（現：日本社会分析学会）会員（1985～
1978	九州大学文学部助手（～1979年10月）	～
1979	山口大学人文学部（文理学部）助教授	日本都市学会会員（1977年～
1986	山口大学大学院人文科学研究科担当	九州都市学会会員（1997～
1992	九州大学博士（文学）	日本都市社会学会会員（1982年～
1992	山口大学人文学部教授	山口地域社会学会会員（2002年～
2001	山口大学大学院東アジア研究科教授	西日本社会学会会長（2004～08年）
2010	山口大学定年退職・山口大学名誉教授	日本学術会議連携会員（2006～15年）
	大学院東アジア研究科非常勤講師（～2012年）	社会調査協会理事（2009～20年）
	山口大学人文学部特別研究員（～2012年）	日本社会分析学会会長（2010～16年）
	山口大学人文学部非常勤講師（～2016年）	日本社会学会評議員（2015年～
		社会調査協会顧問（2020年～

その他、非常勤講師として、

西九州大学家政学部社会福祉学科（1974～76年）、西日本短期大学（1976年）、佐賀医科大学医学部（1978～80年）、中村学園大学（1978～79年）、西南学院大学法学部（1979年）、九州大学文学部（1979～85年）、広島大学学校教育学部（1988年）、吉備国際大学（1992～94年）、大分県立芸術文化短期大学（1993～94年）、久留米大学文学部（1993～2001年）、広島大学法学部（1997年）、沖縄国際大学大学院（1999年）、広島大学大学院社会科学研究科（2001～03年）、熊本大学文学部（2003年）、大阪市立大学大学院（2005年）、福岡県立大学（2013～20年）において、社会学、社会調査法、生活構造論、現代社会論、企業の社会的責任（CSR）論、社会的企業家論などの講義を行った。

学会活動としては、文学部卒業後、直ちに文学部社会学研究室の助手に就任し、日本社会

学会、西日本社会学会、九州大学社会学会に入会した。入会後最初の日本社会学会の大会は東京女子大学で開催された。入会して 50 年後の日本社会学会大会も東京女子大学で開催され、ずいぶん長い間、学会活動に参加してきたなど感慨深いものがあった。

入会している学会の研究大会には、よほどのことがない限り出席してきた。表 1 には、会長への就任のみを示し、詳細は省いたが、それぞれの学会では、理事、評議員などの役職も務め、自分なりに学会活動に貢献してきたと思う。

3. 2 三浦典子の社会学の概要

次いで、筆者の社会学的研究の全体概要をあらかじめ示しておきたい。社会学的研究に関しては、大きく 3 つの分野にまとめることができる。第 1 は、都市化にともなう地域社会の変化を、生活構造、具体的には地域生活者の社会的ネットワークの視点から実証的に比較研究してきた。その成果は『流動型社会の研究』（恒星社厚生閣、1991 年）に代表される。第 2 は、企業組織とコミュニティのかかわりに焦点をおいた一連の実証的研究で、特にコミュニティにおける企業活動に注目した『企業の社会貢献とコミュニティ』（ミネルヴァ書房、2004 年）は、企業の社会貢献活動に関する社会学的研究の先鞭をつけたものと考えている。第 3 は、2001 年に、山口大学大学院東アジア研究科が設置されて以降、東アジアからの留学生を受け入れ、彼らとともに、日本における研究成果を、基層文化を共有する中国や台湾などの東アジア社会に展開し、比較研究を行ったことである。

やや詳しくそれぞれの研究内容と研究成果について述べておきたい。

① 社会移動とコミュニティ

『流動型社会の研究』は、1970 年以降の産業化や都市化にともなう地域社会の変化を、地域住民の社会移動と生活構造（社会関係や集団への参与）に焦点をおいて、土着的な農山村から、工業化とともに流動化していく産業都市、人口が集中する大都市まで、流動化を異にする地域社会で、社会調査によって実証的に明らかにした論稿を集大成したものである。

特に、従来の社会移動の研究では、社会階層間の移動に関心が寄せられていたが、本研究は、階層間移動にともなう地域間の移動とを統合的に把握し、移動者に視点をおいて、生活者の生活の変化と地域社会の変動を連動的に示そうとしたところに特徴がある。

これらの研究の成果の一端は、山口大学社会学研究室の社会調査実習として 3 年間学生たちと現地調査した結果に基づいて、福岡県矢部村（現在八女市）の、生活者の実感に即した福祉の村づくりの地域計画の策定に活かされた。

② 企業の社会貢献とコミュニティ

1990 年より、産業都市における企業の社会的責任や、社会貢献活動の及ぼすコミュニティの変容に関する研究を行ってきた。企業と地域社会のかかわりに関する社会学的研究の多くは、環境問題や産業公害など企業の社会的責任を追及するものが主流であったが、企業も地域社会における一市民という視点から研究を進めていき、企業と地域社会との共存共栄の方向性を探った。

その過程で、企業が社会貢献活動を促進することの重要性を喚起し、特に、企業メセナ（企業の文化芸術活動支援）活動に焦点を絞って、企業活動も関与した、衰退地域のアートによるまちづくりに関する実証的研究を各地で実施し、『企業の社会貢献と現代アートのまちづくり』（溪水社、2010 年）を刊行した。

これらの一連の研究成果に基づいた、企業の社会的責任・貢献に関する筆者の提言によって、山口市に立地する事業所が集まって「山口メセナ倶楽部」という組織が創設された。大企業のないコミュニティにおいても事業所が連携することによって、企業のメセナ活動が可能となることを示すことができた。公益社団法人企業メセナ協議会は、地域メセナの事例として注目された。

③ 東アジアのボランティアリズムとボランティア活動

2001 年より、山口大学大学院東アジア研究科のプロジェクト研究として、日本、中国、台湾における「都市高齢化と社会計画」に関する国際比較研究を実施してきた。三浦典子編『台湾の都市高齢化と社会意識』（溪水社、2010 年）、三浦典子・林寛子編『日本と台湾におけるボランティアリズムとボランティア活動』（溪水社、2016 年）は、その成果をまとめたものである。

従来は、近代化にともなって、自発的な行為の背景となるボランティアリズムが高揚するという考えが一般的であったが、東アジア社会においては、近代化とは関わりなく、東アジア社会固有の基層文化であるボランティアリズムに基づいた社会貢献活動が行われてきていることを解明した。その成果は、東アジア社会における社会的支援のネットワーク形成の可能性を示唆するとともに、わが国も含めて、高齢化など現代社会のかかえる課題への対応として、ボランティア活動や市民活動団体の貢献を示唆することができた。

以上が、社会学との出会いから半世紀以上にわたって進めてきた、社会学的研究の全体概要である。

4 卒業論文『アノミー理論の現代的課題——社会的・心理的アノミーの統合化をめざして』

4. 1 卒業論文のテーマ決定

文学部に進学して以降、内藤莞爾先生の社会学の授業のうち、講義は、もっぱら「末子相続」に関するものであった。講義内容は、内藤先生が九州各地域で進めておられた末子相続に関する調査結果の紹介が主で、先生自ら、末子相続の慣行が持続してきた背景を、辛抱強くさぐっていかれる姿勢は印象的であった。

社会学演習では、E. デュルケムの文献を読んでいった。2 年次には『社会学的方法の規準』が、3 年次には『自殺論』が取り上げられた。『社会学的方法の規準』（1965 年）は、田辺寿利の翻訳本が有隣堂から新たに出版されたものを使用したが、『自殺論』は、当時、鈴木宗忠・飛沢謙一訳のものしかなく、内藤先生がお持ちの本をコピーして使用した⁴⁾。

社会学を学び始め、E. デュルケムの社会学理論は、新鮮で興味深かった。『社会分業論』も現代社会学体系の一冊として翻訳・出版され、デュルケムの社会的概念の一端、「社会

的事実」、「機械的連帯」から「有機的連帯」へという社会変化、さらには有機的連帯をもたらすはずの分業がうまく統制されない「無規制的（アノミー的）分業」などを学んだ。

「アノミー」は、『社会分業論』でデュルケムが社会学用語として復活させたとともに、『自殺論』においても、社会の近代化に伴う社会的原因として顕著にみられることに興味をもち、卒業論文は「アノミー論」に関するものに決めた。アノミーに関する、著書や論文を渉猟するうちに、アノミーが、社会の状態として使われるものと、個人の心理的な状態として使われるものがあることに気づき、社会的アノミーと心理的アノミーを理論的に統合することをテーマとした。

1969年1月10日は卒業論文の提出日であった。卒業論文『アノミー理論の現代的課題——社会的・心理的アノミーの統合化をめざして——』は、提出日の3日前にできあがり、論文の装丁について工夫しようと考えた。そして和紙張りの表紙を作成し、錐で穴をあけて和綴じにして提出した。その時は、大学で学んだすべてを出し切ったという達成感があった。

これまで学生たちが提出した卒業論文は、文学部書庫の社会学研究室の書棚に保管されていた。書庫に入って、時折、諸先輩の卒業論文を拝見することがあったが、圧巻の一冊は、九州大学教養部で社会学の講義を聴いた中村正夫先生のものであった。講義に関しては思い出すことは多くはないが、卒業論文は、漁村の研究で、その論文は毛筆で書かれていた。

形式的には、中村先生の卒論には到底及ばないが、せめて、全力を投入したことを自分自身に納得させるために、卒論の装丁に工夫をこらしたわけである。

ところが、残念なことに、私の提出した卒論は、誰かが持ち出したと思われ、書庫からなくなっていた。容易にコピーできる時代ではなく、卒論の下書きも整理して残していなかったため、手元にあるのは、卒論を要約して『九州大学新聞』に掲載されたものしかない⁵⁾。

4. 2 卒業論文の概要

そこで、要約版の卒業論文に即して、卒業論文の概要を示しておきたい。

論文の目的は、前述したとおりであるが、アノミーという用語は、社会学・社会心理学の領域では頻繁に用いられており、混乱した状況をとらえてはアノミーだ、あるいは意識がアノミックになったなどその規定はさまざまである。社会学の本質的な課題である個人と社会との関係に焦点をおいて、社会的アノミー論と心理的アノミー論とを統合的に把握することを目的とした。

卒業論文の構成の章立ては以下のとおりである

はじめに

第1章 アノミー理論の発展

第1節 社会的アノミー論

(1) デュルケムの『自殺論』にみるアノミー

(2) マーソンの社会構造とアノミー

第2節 心理的アノミー論

(1) デ・グレージアの単純アノミーと先鋭アノミー

第3節 アノミー論諸説のまとめ

第2章 現代社会とアノミー

第1節 社会発展に伴う構造的矛盾とアノミー

第2節 アノミーの概念

(1) 社会的レベルのアノミー

(2) 個人的レベルのアノミー

第3章 社会的・心理的アノミーの統合化をめざして

第1節 分析の視点

第2節 生活構造論

第3節 生活構造の流動化とアノミー

第4章 アノミーへの適応

おわりに

第1章と第2章は、これまでのアノミー理論の検討である。そのうえで、筆者自身のアノミー概念を、社会的レベルのアノミーとして、「社会が全く固着しないで、変化発展していることによって、＜社会変動＞→＜変動による諸矛盾としての社会構造と文化構造のズレ＞が生じてくる。社会構造が連続的に変化していくのに対して、文化構造は一旦制度化されれば価値判断の基準となり、それへの同調は報酬を、それからの逸脱は制裁を伴うので、人間はその制度的文化を受容していく。ところが社会構造の変化に伴うズレがいかんともしがたくなると、新たな行動様式が制度化されていく。このように不連続的な発展によるズレは免れられないこととなる。社会の変化が急激あるいは強度におこった場合には、社会構造と文化構造のギャップは大きくなり、文化構造は拘束力を失い、急激な変化を免れえなくなる。この状況が社会的アノミーである」と整理している。

心理的アノミーについては、「個人的レベルにおいては、個々人が内面化してきた価値の崩壊、あるいは葛藤としてアノミーは現れる」と整理し、この個人的レベルのアノミーは、同時に個人を心理的不安に陥れる。いわゆる心理的アノミーとしての不安感、疎外感、無力感といったものは、その心理的状況がアノミーなのではなく、その個人を心理的不安に陥れるところの内面化された文化（価値）の不安定状態をアノミーと考えなくてはならないとして、アノミーの統合化の方向性を示唆した。

第3章で、統合化を進めるうえで注目した概念が「生活構造」概念で、卒業論文の独創的な発想として位置づけた。生活構造に関しては種々の規定がなされているが、とりあえず「個人を中心として彼が占める地位と役割のセットに基づいて行われる行動の体系」と規定した。

4.3 生活構造への注目

生活構造に注目した理由は、①現代のような流動の激しい社会においては、分析の単位を

社会構造に求めることはマクロ的で大雑把な把握になってしまう。②アノミーの適応としての人間行動を単に心理的要素のみに解消するのではなく、社会構造の文脈とかかわらせて分析しなければならない。③人間は全く社会構造に規定されているという完全受身的存在でしかありえないのではなく、社会構造からの規定を受けつつも、人間の側からの社会への働きかけ、あるいは人間の主体性をも考慮したいという点を重視したからである。

伝統的社会においては、個人の生活空間は個人を中心として、家族、地縁集団、国家へと同心円の広がりを行なっていたが、現代においては、家族という基本的な集団さえも部分的なかわり方しかしておらず、その他多数の第1次集団、第2次集団が多心円的にからまって生活構造は構成されている。

したがって、個人は多面的地位を持ち、それぞれの地位に応じた役割を果たしているといえる。一人の人間を中心として地位の束が考えられ、これらの地位ごとに社会的価値が付加されているので、その価値観に葛藤が存在するような場合には、個人は役割葛藤の危機にさらされることになる。集団の価値規範相互の交叉圧力によって個人が押しつぶされないようにするために、社会の側としては、①役割期待の優先順序を設定、②役割期待間の競争市場への委託、③役割行動の相互の隔離、④役割占有者の組織化のメカニズムによって、緊張は緩和されなければならない。と同様に、個人の側も、①内面化した価値の観点から優先順序を設定する、②役割期待への同調の結果として得られる報酬を全体として最大限にする。③役割間の仕切り、④緊張状況の一貫した回避が必要である。

このような集団への分属による緊張・葛藤は、個人が自己評価をくだしたり、態度を決定する際の照準集団＝準拠集団においても当然高まってくる。現代社会における個人を中心とした生活構造は、多数の所属集団・準拠集団の複雑な関係によって構成されており、複雑な役割期待に対応した行動の体系であるといえる。さらに所属集団は社会構造から直接的に規定されているために、社会構造の変化は直ちに生活構造に波及する。すなわち所属集団は社会的レベルのアノミーに対応させて考えれば、社会構造の連続的变化に伴う変化をなす。ところが準拠集団は、所属集団の場合もあれば非所属集団の場合もあるので、いったん内面化された価値による判断の基準・態度は、社会構造の変化に伴って変化しない。所属集団における地位と準拠集団による基準とのギャップとして、生活構造のレベルにおいてもアノミーへの傾斜が考えられる。

社会が流動的であることは、生活構造に焦点を合わせると、個人が行動基準にしている準拠集団の度重なる移行が生じる。この移行への要請が慢性的であり、アノミーは、内面化された価値を基準とした準拠集団の不安定によってもたらされると考えた。

具体的には、主体の側では個人の社会的移動（上下移動にしろ、水平移動にしろ）、客体の側では大規模な社会構造の変化が考えられる。社会的移動は個人の持つ地位の変化で、上下移動の典型は職業の階層移動である。職業集団のなかでの地位の上昇は、それに伴って生活構造全体が上昇移動するわけではなく、他の地位はほとんどもとのままである場合には、その個人は過去の行動基準に基づいて行動するか、あるいは移動後の行動基準に基づいて

行動するかを選択に迫られる。この移動の結果として、地位・役割間の葛藤が起こる。移動しやすい地位、しにくい地位があることによってもアノミーへの緊張は異なる。

社会的移動は人員構成の配置転換という社会構造の変化によって生じ、個人を中心とした生活構造の編成替え、すなわち態度基準の変化を要請する。内面化した価値による基準に加え、移動によって新たな価値が内面化されるのである。それぞれの価値はともに生活の部分のみしか規制し得ない。

個人の生活構造は多種多様であり、その生活構造に規定されて内面化された価値も多種多様である。流動的社会においては、移動のチャンスが存在しているように見え、それが上昇移動への幻想をもたらすと同時に、マスコミなどの媒介により、意識の平準化がもたらされ、実際には不可能な幻想を追い求め、欲求不満からの逸脱的行動の源となる。

この理想と現実のギャップを、意識的にか、無意識的にか感じさせる契機となる要件が、慢性的に存在すれば、アノミーへの傾向は急速に高まる。それは社会構造の急激な変化であり、危機にしろ、繁栄にしろ、その変化は生活構造の組み換えを要請してくる。

このように考えると、社会構造の変化→生活構造の緊張→パーソナリティの不統合→適応のための行動様式という、生活構造を媒介とした社会と個人との連関がより明らかになると考えた。

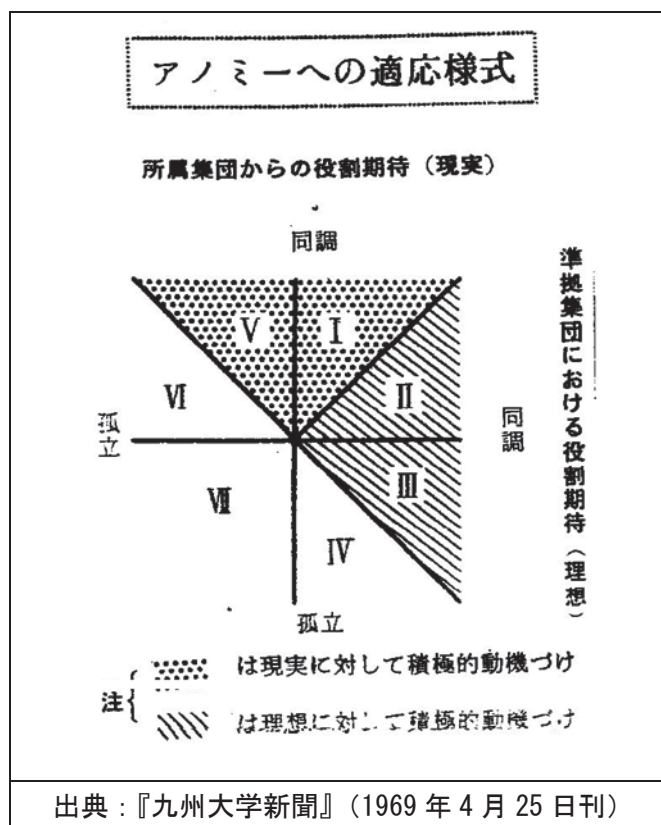
4. 4 アノミーへの適応

最後に、マートンが「社会構造とアノミー」で試みていたように、結果としてのアノミーへの適応行動様式の類型化を試みた。文化的目標と制度的規範の両方を受容する“同調”のタイプは、マートンによると安定した適応タイプであるが、両方の受容は自己分裂という結果を招き、心理的不安定に陥るといえる。文化的目標と制度的規範をともに受容するという事は、両者の使い分けという緊張の橋を渡るような行動様式となるはずである。その使い分けがうまく行われないと、文化構造と社会構造の統合を図る行動が生じる。これはマートンの“反抗”の行動様式にあたる。さらに社会構造に即した文化構造を確立する方向、あるいは文化構造を無視しつつ社会構造の変化を訴えるか、いわゆる“儀礼主義”の方向か、“革新”の方向への移行が行われる。それでもなお適応できない部分は両者を完全に放棄して“逃避主義”へ移行する場合も出てくる。さらに逸脱行動というとりえ方も、文化構造を基準にして考えるか、社会構造を基準にして考えるかによって、一概に逸脱行動とは言い切れなくなってくる。

このような、マートンの適応行動様式を批判的に検討したうえで、生活構造のレベルでアノミーへの適応行動様式の類型化を試みた。

生活構造は、個人が分属している数多くの集団と準拠集団によって構成されており、準拠集団に基づく行動と、実際の地位に応じた役割期待との間に大きなギャップが生じると準拠集団の移行が要請され、これにいかに応じるかによって類型化を考えた。その上で、所属集団における役割期待を縦軸に、自己が同一視している準拠集団における役割期待を横軸

にとり、それぞれに同調するか、孤立するかによって適応行動を示した。さらにどちらを優先するかという動機づけのレベルとして、行動が積極的か消極的かの軸を加えて、7つのタイプに類型化できると考えた（図を参照）。



それぞれのタイプについて簡単に述べると、

- （Ⅰ）は、現実と理想の使いわけのうち、現実を積極的に優先する「現実優先」
- （Ⅱ）は、現実と理想の使いわけのうち、理想の方を積極的に優先する「理想優先」
- （Ⅲ）は、現実を無視して、理想のみを積極的に追求する「理想追求」
- （Ⅳ）は、消極的に自己の理想のみを追求していく「理想同調」
- （Ⅴ）は、理想を捨てて、積極的に現実に生きる「現実追求」
- （Ⅵ）は、消極的に現実の生活を繰り返すのみの「現実同調」
- （Ⅶ）は、両者から孤立して逃避する「逃避」

である。

この分類によると、社会が正常な場合には、（Ⅰ）（Ⅱ）のタイプが圧倒的に多いが、アノミックになると（Ⅲ）～（Ⅶ）のタイプの行動が増大する。その中で左下半分は私化の方向に、右上半分は全体社会化の方向にアノミーからの統合を求めていくと考えられる。社会がどの程度アノミックになっているのかということは、諸個人の行動の総体のうち（Ⅲ）～（Ⅶ）に分類される行動の増大として知ることができる。さらにこれらの行動は、生活構造

のどの部分と相関関係が強いかを測定できれば、アノミーの進行がどのように進んできているのかも知ることができる。

この図式はマートンの図式をもとにして、動機づけが積極的か消極的かの軸を加えたものにすぎないが、社会構造によって予期された行動のみを人間が行うというのではなく、人間が自分自身の行動を積極的に認識して、選択可能な限りで自発的に行動しうる点をも重視した分類である。この積極的な態度によって、アノミー状況を自己の望む方向へ統合させるという人間の主体性も浮き彫りにされるし、それが全体的社会化の方向に組織化されることによって、個々バラバラな行動としてではなく、ある集合体としての行動、いわゆる社会運動を可能にし得る。この集合体は、大衆社会における無知な大衆、あるいは孤独な群衆ではなく、主体性をもった人間の集合体である。

卒業論文は、社会的アノミーと心理的アノミーを統合的に把握しようとした試みであり、分析の視角を生活構造に求めて論を進めたが、抽象的・一般的なレベルでしか展開できなかった。今後、この理論から導かれる仮説を実証していくという中範囲の研究が必要であると、論文を締めくくった。

卒業論文をあらためて詳細に読んでみると、社会学研究室で内藤先生から学んだこと、鈴木先生から学んだことに加えて、興味を持って読み進めていった論文が、見事に相乗しあっていることに気づかされる。

5 研究室の仲間たちとの学び

卒業論文は、学生時代に学んだことを、個人の論文の形で総括したものである。卒業論文の作成以外にも、研究室の学生同士で学んだことは、その後の研究活動の礎石となっている。

内藤先生の演習資料を受講生みんなで作成したことは、前述したとおりである⁶⁾。このような共同作業は、学生同士の結びつきを強め、3年次に、社会学研究室で『大学祭』に「社会学とは何か？」をテーマにシンポジウムを開催した。それまでは、社会学研究室では事前に「学生アンケート調査」を実施して、その結果を発表する形で「大学祭」に参加していたが、そもそも社会学とはどのような学問であるかを自主的に学習しようと、シンポジウムを企画した。

「社会学とは何か」は、まず、「社会学の歴史」と「社会学と隣接科学」について、学生たちの学習成果を発表し、次いで、先生方自身の社会学とは何かを話していただき、そのあとでディスカッションを行った。

内藤莞爾先生は、最後までわれわれにお付き合いいただいたが、社会学がわからないままに懐疑的な意見を述べていたことに堪忍袋の緒を切られ、「お前らの議論は、アンパンがよいか、まんじゅうがよいか、見比べているだけにすぎない。本当に相撲を取ろうと思うなら、アンパンでも、まんじゅうでも、食ってからしろ！」と言われた。

言われてみれば確かに、社会学の入り口に立ったばかりにすぎないことを思い知らされ、なんでも食ってみようと大いに反省した。

このような、学生たちの自主的な活動を見て、当時、西日本地域で社会学研究室があるのは、九州大学と山口大学と熊本大学の3大学であり、鈴木広先生は「それぞれの大学の先生に話をしあえるから、学生同士の学会のような研究会をつくって活動したら」と、話を持ちかけられた。そして、山口大学の近沢敬一先生と熊本大学の越井郁郎先生の協力も得て、「西日本社会学学生ゼミ」が実現した。



第1回西日本社会学学生ゼミ 熊本大学研修所 昭和42年11月

まず、九州大学社会学研究室に3大学の代表が集まり、設立総会を開催した。総会で、会の名称をYS (Young Sociologist) 会とし、ゼミの開催の準備を行った。そして、第1回西日本社会学学生ゼミを、昭和42年11月11・12日に阿蘇の内牧にある熊本大学研修所に集合して開催した。学生ゼミは、我々が4年次に進学し、3年生にバトンタッチし、第2回YS会は山口大学で開催された。その後は、大学紛争が激しくなり、残念ながら、YS会は自然消滅した。

また、鈴木先生より、夏休み期間中に、長野県で社会学セミナーが開催されるという情報をいただいた。そのセミナーは、森岡清美・山根常男先生が主催者となって、長野市教育委員会の協力をえて、昭和42年8月1日から7日まで、「飯綱高原のセミナーハウス」で開催されるというものであった。

セミナーは、10人の講師が午前、午後それぞれ講義をし、夜には講師と受講生が討議するという密度の濃いセミナーであった。受講応募者は全国から多数あったようであるが、セミナーハウスの収容能力から32名に絞られ、九州大学社会学研究室からは6人が参加した。参加費1万円と旅費のためにみなでアルバイトをした。

ちなみに、講師は、2人の主催者以外、作田啓一、富永健一、大橋薫、安田三郎、塩原勉、松島静雄、光吉利之先生で、その講義内容は、森岡清美・山根常男編、1968『現代社会学の基本問題』に収録され、有斐閣双書として刊行された⁷⁾。

セミナーハウスの宿泊施設は、1 部屋に 2 段ベッドが 4 つ置かれていた。各地から参加した 8 人の学部女子学生とは、セミナー終了後もしばらくは連絡しあっていたが、社会学の研究者となったのは、筆者のみであった。



第 1 回飯綱高原社会学セミナー 長野市飯綱高原国民宿舎 昭和 42 年 8 月
森岡清美先生（前列左から 4 人目）、山根常男先生（前列左から 5 人目）

6 まとめ：社会的移動とアノミー

社会学研究室での 3 年半の学生生活は、以上みてきたように、総じて充実した生活であったといえる。卒業後は、内藤先生の推薦もあって、1969 年に社会学研究室に文部教官助手として採用された。就任直後、学生たちによって大学の建物が占拠されるという大学紛争が九州大学でも勃発し、大学の講義もゼミも開催が困難になった。

大学紛争収束後、鈴木先生は在外研究のため、1 年間研究室に不在であったが、内藤先生は「末子相続」の調査研究を進められた。筆者は、助手として、現地での聴き取り調査、調査後のデータ整理、内藤論文の校正などの仕事をした。

鈴木先生の帰国後、鈴木先生が獲得された文部省科学研究費の経理の仕事が助手の仕事のひとつとなり、その研究費に基づいて組織された「社会移動研究会」に加わることとなった⁸⁾。

社会移動研究会の活動の一環として、安田三郎の『社会移動の研究』（東京大学出版会、1971 年）の検討会などにも参加し、その研究成果が「社会的移動とアノミー」に関する論稿の発表である。まず、西部社会学会の『研究通信』に投稿し⁸⁾、九州大学文学部哲学科紀要『哲学年報』に、内容を拡充して発表した⁹⁾。

卒業論文において、社会的アノミーと心理的アノミーとを統合的に把握するための視点として、「生活構造」概念を提示した。現代都市社会においては、地位の変化が激しく、アノミーは生活構造の流動化や緊張として露呈してくる。個人の社会的地位の変化という社会移動の研究とアノミーの統合的な把握との接点に、「社会的移動とアノミー」は、位置づけられる。

社会移動の研究の中で、特に関心をもったのは、ソローキンの『社会移動論』（初版、1927年）の中の、第6部「社会的移動の結果」の部分である。ソローキンは「人間の行動と心理についての移動の効果」として、移動が個人の態度に及ぼす否定的な効果を述べており、社会移動の効果に関する「分離仮説」と総称されている。アノミー的態度も否定的な効果といえるが、分離効果を検証しようとする研究が多く行われてきた。

これらの先行研究を広く検討してみると、社会移動の効果は「分離効果」だけではなく、移動に対する先取りした社会化がなされているかどうかによって、移動後の適応が異なることも明らかとなっている。「社会化」がなされたうえでの移動は分離効果をおよぼすことなく、社会的適応がなされていることも指摘されている。これがいわゆる社会移動の効果に関する「社会化仮説」である。

「社会的移動とアノミー」論文は、理論的に2つの仮説の比較検討を行ったものである。しかしながら、仮説の検証のためには、個人のアノミー的態度を測定する「アノミー尺度」の確立が必要であるところまで述べた。

大学院に進学して、修士論文として1974年に『社会移動とアノミー——移動効果と生活構造に視点をすえて——』を提出した。修士論文は、卒業論文以降の研究を総括したものである。

目次は

第1章 序論——問題の所在——

第2章 社会的移動の概念

第1節 ソローキンの『社会移動論』にみる移動概念の検討

第2節 社会的移動の測定

(1) 客観的側面 (2) 主観的側面

第3章 社会的移動の効果

第1節 ソローキンの移動効果論

第2節 個人的レベルにおける移動効果論

第3節 移動効果をめぐる2つの仮説——分離仮説と社会化仮説——

第4章 社会的移動と生活構造

第1節 インフォーマルな社会関係

(1) 家族・親族関係 (2) 友人関係 (3) 近隣関係

第2節 フォーマルな社会関係

第3節 社会的移動と生活構造の変化

第5章 社会的移動とアノミー

第1節 アノミー的態度の測定

第2節 アノミー的態度の諸相

第3節 社会的移動とアノミー

第4節 移動・生活構造・アノミー

第6章 結論と今後の課題

である。

日本においては、当時、社会移動と生活構造の変化に関する実証的研究はなされていなかったもので、欧米の社会学雑誌に発表されている実証的研究論文のほとんどに、目を通して修士論文を作成した。オリジナルなデータで仮説を実証することはできなかったが、修士論文は、九州大学社会学研究室での学びの到達点として位置づけることができよう。

[注]

- 1) 三浦典子、2021「プロローグ——本書の位置づけ」『内藤莞爾の社会学——九州大学文学部社会学研究室の窓から——』学文社、1頁。
- 2) 詳細ないきさつについては、三浦典子、2014「流動型社会の功罪」『社会分析』41、115～117頁を参照のこと。
- 3) 同上、130頁。
- 4) 社会学演習のための資料準備については、三浦典子、2021『内藤莞爾の社会学——九州大学文学部社会学研究室の窓から——』学文社、76～77頁に詳しく述べている。
- 5) 卒業論文が『九州大学新聞』（1969年4月25日刊）に掲載されるようになったいきさつは、三浦典子、2026『鈴木広の社会学——九州大学文学部社会学研究室の窓から——』学文社、80頁に詳しく述べている。
- 6) 「社会移動研究会」会の発足と直後の活動に関しては、三浦典子、2026『前書』95～97頁に詳しく述べている。
- 7) セミナー開催のいきさつについては、森岡清美・山根常男編、1968「はしがき」『現代社会学の基本問題』有斐閣双書、1頁を参照のこと。
- 8) 三浦典子、1972「社会的移動とアノミー」『研究通信』西部社会学会、24、1-6頁。
- 9) 三浦典子、1972「社会的移動とアノミー——その基礎視角をめぐって——」『哲学年報』（九州大学文学部）第31輯、149-70頁。

所属：山口大学 名誉教授

E-mail：otani@yamaguchi-u.ac.jp